

第四回

国語問題

〔注意事項〕

- 一、試験開始の合図^{あいず}があるまで、開かないこと。
- 二、問題は□・□で、二十ページにわたって印刷してあります。
ページが抜ける^ぬなどとしていた場合には、試験監督^{かんとく}の先生に申し出なさい。
- 三、解答は、すべて解答用紙に記入し、受験番号・氏名をもれなく、正確に記入すること。
- 四、問題冊子^{さっし}の表紙にも、受験番号・氏名を必ず記入すること。

受験番号

氏名

◎文中からそのまま抜き出して答える場合、句読点や記号は一字とすること。また、ふりがなのある漢字は、ふりがなをつけなくてもかまいません。

— 1 —
次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

吹奏^{すいそう}楽部^{がくぶ}に所属する中学生である「ぼく」(三熊^{みくま})は、ある日の下校中、学校の近所で一人暮らしをしている老婦人・藤澤^{ふかさわ}さんが、家の鍵^{かぎ}をなくして困っているところに出くわした。その時に一緒に探^{いっしょ}し、鍵^{かぎ}を見つけてあげたことがきっかけで藤澤さんと親しくなり、時々会^あうと話をするようになる。「ぼく」は藤澤さんの誕生日にクラリネットを演奏しようと思いつき、クラスメイトで吹奏楽部の部長でもある高城^{たかぎ}にアドバイスをもらうなどして、練習にはげんでいた。

それからぼくは毎朝『アメイジング・グレイス』の練習を続けた。高城に「悪くないんじゃないか」といつてもらえたのは半月後。なんとか目的の日に間に合わせる事ができた。

その日の放課後、ぼくはいつものように帰り道の途中^{ちゆうちゆう}で、庭先に出てきた藤澤さんにいった。

「誕生日、おめでとうございます。きょうだっていいでしたね」

「まあまあ、おぼえていてくださったの。直接誕生日のお祝いをいっていただくのなんて何年振^ぶりかしら」
顔をほころばせる藤澤さんに、ぼくはちよっぴり照れながら続けた。

「誕生日のプレゼントも用意してきたんです。プレゼントもいいけど、ものじゃなくてクラリネットの演奏なんですけど。それで、ここだと近所迷惑^{めいわく}になるかもしれないから、家の中にお邪魔^{じゃま}してもいいですか？」

「もちろん、どうぞおあがりになって」

藤澤さんに歓迎^{かんげい}されて、ぼくは先月ケーキをごちそうになった居間^{いま}でクラリネットの準備を始めた。正面のソファに座^{すわ}った藤澤さんは、わくわくした表情で準備^あが整^{ととの}うのを待っていた。

観客は藤澤さんだけといつても、こんなふうにはひとりきりで演奏するのはじめてだったから、ぼくはコンサートのときにも負けないくらい緊張^{きんちよう}していた。「それじゃあ、聴^きいてください」と伝えると、藤澤さんが拍手^{はくしゅ}を送ってくれた。ぼくはマウスピース^{マウスピース}に唇^{くちびる}をそえて、練習を重ねた曲を吹きはじめた。

① 出だしのメロディを聴いた藤澤さんの顔に驚^{おどろ}きが浮^うかんだ。『アメイジング・グレイス』は藤澤さんのおきにいりの曲だ。

前にそう話していた。反応を気にしていると余計ガチガチになってしまいそうだったから、ぼくは 1 両目を閉じて演奏を続けた。

高城の厳しい指導のおかげで、いつもより自信を持ってクラリネットを吹くことができた。

吹奏楽部に入^いって、担当楽器がクラリネットに決まったときは、ぼくにはもっとジミ^いな楽器のほうが向いてるんじゃないかと思^{おも}ったりもしたけど、いまだはこの楽器のやさしく温かな音色を、ぼくはとても気に入っていた。

普段^{ふだん}の音楽室とは違^{ちが}う、小さな居間での演奏。部屋いっぱいにやわらかな響^{ひび}きが満ちて、その響きにつつまれているうちに、ぼくの緊張も薄^{うす}れてきた。

演奏を最後まで終えて、おそろおそろ目を開けると、藤澤さんの目尻^{めじり}に涙^{なみだ}が光っていた。ぼくがそれを見てうろたえていると、藤澤さんが再び盛大^{せいたい}に拍手をしてくれた。

「ほれほれするような演奏だったわ。素敵^{すてき}な誕生日プレゼントをありがとう」

「いえ、そんな、喜んでもらえてうれしいです。練習してきた甲斐^{かい}がありました」

ぼくはほっとして頬^{ほお}をゆるめた。藤澤さんが涙を指でぬぐっていった。

「昔、息子がまだ小学生のころ、いまのあなたとおなじように、『アメイジング・グレイス』を吹いてくれたことがあったのよ。クラリネットじゃなくてリコーダーだったけれど。あなたの演奏を聴いていたら、そのときのことを思いだしたわ」

⑤ 遠くの景色を見つめるような藤澤さんの眼差しは、これまで見たことがないほど寂しそうだ。遠慮して尋ねないようにしていたけど、ぼくは思いきって藤澤さんにきいてみた。

「息子さんとは、あんまり会ったりしないんですか？」

「ええ、なにせ遠くに住んでいるから。それでも年に数回は顔を見せてくれるのだけれど」

藤澤さんはテーブルに視線を落とすと、ためらいがちな声音で続けた。

「息子には前々から、いっしょに住まないかといわれているの。けれどわたしはもうずっとひとり暮らしで暮らしてきました。いまさらまだかといっしょに生活するのは億劫で。それに息子の家には、三熊さんと同年輩の孫もいるから、いきなりこんなおばあちゃんが家に転がりこんだら、迷惑するんじゃないかと思ってしまっ……」

② 「そんなことないですよ」

ぼくはとっさに口をはさんでいた。それも無意識に強い口調で。

「ぼくは、藤澤さんみたいなおばあさんといっしょに暮らすことになったらしいですよ。ほんとに、そう思います」

ぼくは 2 藤澤さんの顔を見つめた。決して嘘じゃないことが伝わるように。藤澤さんは「」を丸くしてから、笑顔にもどってこたえた。

「ありがとう。そうだわ、せっかくだから紅茶をめしあがっていつて。すぐに用意しますから」

藤澤さんはそそくさと立ちあがって、ぼくが遠慮するのも聞かずに紅茶をいれにいった。台所から「」をすすする音が聞こえた気がしたけど、ぼくは聞こえなかったふりをすることにした。

「昨日、図書館に行く途中で、クラリネットの『アメイジング・グレイス』を聴いたんだが、あれを吹いていたのは三熊じゃないのか」

朝練に向かう途中で会った高城に尋ねられて、ぼくはびっくりしてしまった。

「たぶんそうだけど、ぼくが吹いてるってよくわかったね」

「まあ、偶然^{ぐうぜん}近所でおなじ時期におなじ曲をクラリネットで吹こうとしてるやつなんて、そうはいないだろうからな」

高城は乗っていた自転車^とを停めて、ぼくの演奏を最後まで聴いていたらしい。ぼくが恥^はずかしくなっていると、高城は「いい演奏だった」とほめてくれた。

「三熊が演奏を聴かせたいっていつてたのは、あの立派な家の住人だったんだな。いったいどんな知りあいなんだ？」

「学校帰りにたまたま知りあったおばあさんだよ。昨日が誕生日だったから、プレゼントの代わりにおきにいりの曲を演奏してあげることにしたんだ」

「たまたま知りあった？ 親戚^{しんせき}とかでもなくて、赤の他人なのか？」

③ 高城が理解できないというような声でいてくるので、ぼくは戸惑^{とまど}いがちにうなずいた。

「どうして三熊はそのおばあさんに、そんなに親切にしてやるんだ。『アメイジング・グレイス』だって、半月以上練習していただろう。それも相当熱心に」

「どうして、っていわれても……」

ぼくは言葉につまってしまった。高城は心底^{しんぞこ}不思議そうな顔で、ぼくの返事を待っていた。

「その、なんていうか、あのおばあさん、ずっとひとりで暮らしてるんだよ。ぼくのほかに話をする相手もあんまりないみたいでさ、それで学校帰りにおしゃべりにつきあったりしてあげてただけ……」

しどろもどろにこたえながら、ぼくは自分の言葉に動揺^{どうよう}していた。

藤澤さんのことを、ぼくはそんなふうに思っていたんだろうか。ひとりぼっちのかわいそうなお年寄りだから、親切にしてあげよう、なんて。

藤澤さんといっしょに話したり、演奏をプレゼントしたりしたのは、気の毒^{にく}な藤澤さんにやさしくして、いいことをした気分になるためだったんだろうか。そうして自分が満足するために、ぼくは藤澤さんを利用していただけだろうか。

高城が感心したようにいった。

「三熊はすごいな。おれにはとても真似^{まね}できん」

「いや、そんなことないよ……」

ぼくは弱々しいいかえした。藤澤さんと過^きごした記憶^{きおく}が、急速に色あせていくように感じて、ぼくは胸が苦しくなった。

ぼくと藤澤さんが話をするのは、部活がない日の帰り道だけだ。部活が終わる時間になると、藤澤さんは通りから見える窓辺の部屋にはもういなくなっている。

だからきょうは藤澤さんと顔を合わせないですむはずだった。それなのにぼくが部活後に通りかかると、藤澤さんはなぜかまだいつもの部屋にいて、ぼくに手を振ってきた。

「昨日は誕生日プレゼントをありがとう。きょうはプレゼントのお礼をしたくて、あなたが通るのを待っていたの」

「そんな、お礼なんていいですよ。誕生日プレゼントなんですから」

「そうおっしゃらずに受け取って。前とおなじお菓子^{かし}で心苦しいのだけれど」

気まずい内心^{こころ}を隠^{かく}して、ぼくは藤澤さんからお菓子の紙袋^{かみぶくろ}を受け取った。ぼくがその紙袋を見おろして言葉をさがしていると、藤澤さんがうれしそうに続けた。

「ほんとうに、三熊さんはとても親切でいいかたね。昨日の『アメイジング・グレイス』も、それはもううれしかったけれど、あなたのようなかたとお知りあいになれたことが、わたしにとつてなによりのプレゼントよ」

ぼくはじつと藤澤さんの顔を見た。藤澤さんの言葉は、うわべだけのお世辞^{せじ}には聞こえなかった。心からそう思いこんでいるみたいだった。

罪悪感^{ざんか}がお腹^{はら}からのどまでせりあがってくるように感じて、ぼくは制服^{むね}の胸^{むね}をぎゅっとつかんだ。

「……ぼくは、そんないい人なんかじゃないです」

ぼくがうつむいて言葉をしばらくだと、藤澤さんが「えっ？」と戸惑った声でつぶやいた。ぼくはその顔を見ずに告白を続けた。

「学校の人にも、いいやつだ、とかよくいわれるんですけど、ぼくにはほかに取り柄がないから、いい人らしく振る舞って、ほめられたり感謝されたりすることでほっとしてるってだけで、ほんとうにやさしいわけでも親切なわけでもないんです。いまこうして藤澤さんと話してるのだって、もしかすると……」

A

そこまで言葉にしくなくても、藤澤さんにはぼくのいおうとしたことが伝わってしまったに違いない。藤澤さんの表情をたしかめるのが怖くて、ぼくはうつむいたままお辞儀をしていった。

「お菓子、ほんとうにありがとうございます。きょうはもう遅いから、これで失礼します」

早足で帰ろうとしたぼくの背中に、「ええ、またお話ししましょう」とやさしい声がかけられた。

3

して振り向くと、

藤澤さんはいつもどおり上品に微笑んでいた。

無理してつくった笑顔でこたえると、ぼくは逃げるようにその場から立ち去った。

月曜の放課後、ぼくは藤澤さんの家を避けて、遠まわりの道で帰ることにしようかと悩んでいた。金曜に別れたとき、藤澤さんはいつものように笑顔で手を振っていたけど、ぼくが藤澤さんを憐れんでいたことを知って、内心不愉快に思っていたかもしれない。そんな想像をすると、藤澤さんに会うのが怖かった。

だけど、もらったお菓子のお礼をいわないわけにはいかない。ぼくはしかたなく、いつもどおりの道で帰ることにした。

ツバキの花がきれいに咲いた藤澤さんの家の庭が見えてくる。そこでぼくはいつもと様子が違うことに気がついた。藤澤さんの家の明かりがついていなかったのだ。

ぼくは足を止めて、藤澤さんがいつもいる部屋の窓を見つめた。これまでこの時間に藤澤さんが家を留守にしていたことは

なかった。

家の前を通りすぎた。

B

そのときはまだ、もっと怖ろしい可能性に気づいていなかった。けれどその後も藤澤さんが留守の日が続くにつれて、ぼくの頭の中で不吉な予感がふくらんでいった。

もしかして藤澤さんは、病気や怪我で入院でもしてるんじゃないだろうか。それとも、まさか……。

その後、学校に三熊あての手紙が届く。差し出し人は藤澤さんだった。

きれいな透かしの入った便箋には、さらさらと流れるような文字が書かれていた。達筆すぎてちょっと読みづらいその文字を、ぼくは夢中で読み進めた。

『最後にお会いしたときから一月以上がたち、寒さの中にも日差しのやわらかさが感じられる季節となりました。三熊さんはお元気でお過ごしでしょうか。もっと早くにお便りを差しあげたかったのですが、筆を執る体力もなかなかもどらず、そのせいで三熊さんにご心配をおかけしてしまったのではないかと心を痛めております』

藤澤さんが書いた文字を見るのははじめてだった。だけどその文章からは、藤澤さんの声が聞こえてくるようで、たしかに藤澤さんが書いたものだとうかつた。ぼくはほっとするあまり、体中の力がぬけてしまいそうになった。

手紙によると、藤澤さんはほんと最後に会った翌日、転んで怪我をしてしまい、しばらく入院していたらしい。幸い怪我は順調に回復しているそうだけど、ひとりで生活するのは大変なので、いまは遠くの息子さんの家で療養を続けているのだという。

怪我が治ればまたひとりで暮らすこともできるけど、藤澤さんはこれをきっかけに、息子さんの家族と同居することを決めたいらしい。ぼくと同年輩だというお孫さんも、藤澤さんのことを歓迎してくれているそうだ。

『残念なのは、これまでのように三熊さんと話せなくなってしまったことです。三熊さんのおしゃべりは、いつもとてもうれしく、たのしい時間でした。そのようなかけがえのない時間をくださったことに、ただただ心から感謝しております。三熊さんは自分のことを、いい人などではないとおっしゃっていたけれど、わたしはやはり、あなたのやさしさや親切さは、とてもトウトイものだと思います。どうかその心根^{こころね}を大切に、素敵な大人になってください』

手紙の最後には、怪我がすっかりよくなったら荷物の整理にもどる予定なので、そのときにまた会えたらうれしい、とも書いてあった。そこまで読み終えたあとも、ぼくがじっと手紙を見つめたまましていると、遠慮がちな高城の声が聞こえた。

「もしかしてその手紙をくれたのは、おまえが『アメイジング・グレイス』を吹いてやった例のおばあさんなのか？」

「うん、ずっと会えなくて心配してたんだ。元気そうでほんとによかった……」

ぼくの声は涙で震えていた。息をのむような音が聞こえたあとで、高城が静かにいった。

⑥「……ほんとにいいやつだな、おまえは」

⑦いつもと違って、高城にそういわれても、ぼくがうしろめたさを感じることはなかった。それはきつと藤澤さんがくれた

言葉のおかげだ。

便箋に書かれた達筆な文字を見つめていると、その向こうで藤澤さんが、にっこりとぼくに微笑みかけてくれているような気がした。

(注1) マウスピース：管楽器の、口をあて息を吹きこむ部分。

(注2) 億劫：めんどろで気が進まないさま。

(注3) 療養：体を休めて、健康の回復をはかること。

(如月かずさ『給食アンサンブル2』)

問一 〓線 ㉠ ㉡ の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直して書きなさい。

問二 〓線 ㉠ 「うろたえて」・㉡ 「そそくさと」・㉢ 「お世辞」の意味として最も適当なものをそれぞれ後のの中から選び、記号で答えなさい。

㉠ 「うろたえて」

- ア 突然のこと不思議に思つて
- イ 相手に寄り添い気づかつて
- ウ 驚きのあまりあわてふためいて
- エ 予想外のことにがっかりして

㉡ 「そそくさと」

- ア せわしくふるまう様子で
- イ 冷たくそつけない態度で
- ウ どこか思いつめた雰囲気で
- エ わざと明るい表情を作つて

㉢ 「お世辞」

- ア 相手を説得するためによく考えぬかれたことば
- イ 相手に心からの感謝を伝えるためのお礼のことば
- ウ 相手にわからないように批判するいやみなことば
- エ 相手を喜ばせるために必要以上によく言うほめことば

問三

1

3

に入ることはとして最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二回使用することはできません)

ア じつと イ はつと ウ ほつと エ ぎよつと オ そつと

問四

……線㉑【】を丸くして「①【】をすする」の【】に、それぞれ適当な漢字一字を入れて、慣用表現を完成させなさい。

問五

——線①「出だしのメロディを聴いた藤澤さんの顔に驚きが浮かんだ」とありますが、藤澤さんはどんなことに驚いたのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「ぼく」が難しい曲を選んだことと、それを「ぼく」がいつも簡単に演奏しはじめたこと。
 イ 「ぼく」が選んだ曲が藤澤さんの好きな曲であったことと、それを「ぼく」が覚えていてくれたこと。
 ウ 「ぼく」が藤澤さんの誕生日を覚えていたことと、誕生日プレゼントの演奏の練習に半月もかけていたこと。
 エ 「ぼく」が藤澤さんのために誕生日プレゼントを用意していたことと、それがフルートの生演奏であったこと。

問六

——線②「そんなことないですよ」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分のことがきつすぎたかもしれないと後悔こうかいしている。
 イ 自分の本当の気持ちを伝えることにためらいを感じている。
 ウ 思い悩んでいる藤澤さんを少しでもはげましたいと思っている。
 エ 自分のことが藤澤さんを悩ませたのではないかとあせっている。

問七 — 線③「高城が理解できないというような声でいてくる」とありますが、高城はどんなことが理解できなかったのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 三熊がどうやって藤澤さんと知り合ったのかということ。

イ 三熊がなぜ藤澤さんの誕生日を覚えていたのかということ。

ウ 三熊がなぜ『アメイジング・グレイス』を練習していたのかということ。

エ 三熊がなぜただの知り合いである藤澤さんに親切にするのかということ。

問八 — 線④「藤澤さんと過ごした記憶が、急速に色あせていくように感じて、ぼくは胸が苦しくなった」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 藤澤さんにもう会えなくなるのではないかと強い不安を感じた。

イ 高城にほめられるほどこいことをしたとは思えず、自分の非力さを感じた。

ウ 自分は藤澤さんに対していい人ぶった行動をしていただけなのではないかと感じた。

エ 藤澤さんに優しくすることが、実は藤澤さんを悲しませているのではないかと感じた。

問九

A

に、「ぼく」の言おうとしたことを想像して、一文で書きなさい。

問十——線⑤「^にぼくは逃げるようにその場から立ち去った」とありますが、この時の「ぼく」の気持ちとして最も適当なものを次の中

から選び、記号で答えなさい。

ア 藤澤さんに自分の本当の気持ちを正直に伝えるのがこわかった。

イ 藤澤さんに対する申し訳なさから、いたたまれない気持ちになった。

ウ 藤澤さんに「またお話ししましょう」と言われたが、はつきり断れなかった。

エ 見返りがほしくて優しくしていたことを、藤澤さん本人に気づかれたと思った。

問十一

B

に入る一文として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア ぼくと会いたくなくて、わざと家を空けたんだろうか

イ 藤澤さんは息子さんと一緒に暮らすことにしたんだろうか

ウ 藤澤さんが何か事件に巻きこまれてしまったのではないだろうか

エ 暗い部屋に閉じこもって、一人で悩んでいるんじゃないだろうか

問十二

——線⑥「……ほんとにいいやつだな、おまえは」とありますが、高城は「ぼく」のどういうところを「いいやつ」だと感じたのでしょうか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 何も事情を知らない高城にも、わかりやすく丁寧^{ていねい}に説明してくれるところ。

イ たまたま知り合ったおばあさんの安否^{あひ}を気づかうほど、純粹^{すい}で優しいところ。

ウ どんなにいいことをしても、自慢^{まん}することなく常に謙虚^{けんきょ}な姿勢をくずさないところ。

エ 「ぼく」が部活の時だけでなく、学校を離れたところでも音楽と真剣^{しんけん}に向き合っているところ。

問十三

——線⑦「いつもと違って、高城にそういわれても、ぼくがうしろめたさを感じることはなかった」とありますが、ここから「ぼく」のどのような変化を読み取ることができますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 常に周囲の顔色をうかがいながら生活してきたが、どんなときでもありのままの自分でいようと思った。

イ 長い間自分の本音がわからずとまどうことが多かったが、音楽を通して自分自身を見つめ直すことができた。

ウ 今まで周りからほめられても自分自身に自信が持てずにいたが、自分の良さを素直に認められるようになった。

エ 他人に優しくすることがたとえ同情によるものであっても、自分がしてきたことは間違^{まちが}いではなかったと気づいた。

二

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

イヌやネコなどに対して、現代の人間の場合は、初対面の人に威嚇や攻撃など敵対的な行動をすることはまずありません。小さな子どもどうしであればありえるかもしれませんが、普通の大人であれば、失礼のない程度に愛想よくするのではないでしょうか。

どのくらい愛想よくするかは、「
」も重要なポイントになっているように思います。たとえば、近所に住んでいる人や、学校の同級生、あるいは会社の同僚など毎日のように顔を合わせる人であれば、敵対していてもいいことは何もありません。もし敵対していたら、顔を合わせるたびに嫌な気分になってしまいますし、困ったときに助けられないかもしれません。多くの人は、頻繁に会う人たちとはできるだけ仲良くするように、少なくとも陰湿な関係にならないように努力するのではないかと思います。

それでは近所の人ではなく、旅先でたまたま出会った人であればどうでしょうか。たとえ陰湿な雰囲気になったとしても二度と会うことはありません。失礼のない程度の付き合いはするにしても、良好な関係を築く必要性は感じないのではないのでしょうか。

このように、今後もつきあう可能性がある人となない人で態度を変えることは、いたって合理的です。この傾向は「進化ゲーム理論」という理論的な研究でも確かめられています。同じ個体と長く付き合い合えば付き合い合うほど、協調的な行動が有利に働くことから、付き合いの長さが安定な協力関係を生み出すひとつの要因になることが分かっています。

そして付き合いの長さに大きく影響を与えるのは寿命の長さです。寿命の長い生物どうしは生涯でまた出会う可能性が高まります。人間は長生きで成長に時間のかかる生物です。これは少産少死の戦略によるものです。その結果として同じ他人と長く付き合うことになり、敵対したり無視したりするよりも仲良くなって協力し合うほうがお互いの生存に有利になります。① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩ ⑪ ⑫ ⑬ ⑭ ⑮ ⑯ ⑰ ⑱ ⑲ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝ ㉞ ㉟ ㊱ ㊲ ㊳ ㊴ ㊵ ㊶ ㊷ ㊸ ㊹ ㊺ ㊻ ㊼ ㊽ ㊾ ㊿ ㏀ ㏁ ㏂ ㏃ ㏄ ㏅ ㏆ ㏇ ㏈ ㏉ ㏊ ㏋ ㏌ ㏍ ㏎ ㏏ ㏐ ㏑ ㏒ ㏓ ㏔ ㏕ ㏖ ㏗ ㏘ ㏙ ㏚ ㏛ ㏜ ㏝ ㏞ ㏟ ㏠ ㏡ ㏢ ㏣ ㏤ ㏥ ㏦ ㏧ ㏨ ㏩ ㏪ ㏫ ㏬ ㏭ ㏮ ㏯ ㏰ ㏱ ㏲ ㏳ ㏴ ㏵ ㏶ ㏷ ㏸ ㏹ ㏺ ㏻ ㏼ ㏽ ㏾ ㏿ 㐀 㐁 㐂 㐃 㐄 㐅 㐆 㐇 㐈 㐉 㐊 㐋 㐌 㐍 㐎 㐏 㐐 㐑 㐒 㐓 㐔 㐕 㐖 㐗 㐘 㐙 㐚 㐛 㐜 㐝 㐞 㐟 㐠 㐡 㐢 㐣 㐤 㐥 㐦 㐧 㐨 㐩 㐪 㐫 㐬 㐭 㐮 㐯 㐰 㐱 㐲 㐳 㐴 㐵 㐶 㐷 㐸 㐹 㐺 㐻 㐼 㐽 㐾 㐿 㑀 㑁 㑂 㑃 㑄 㑅 㑆 㑇 㑈 㑉 㑊 㑋 㑌 㑍 㑎 㑏 㑐 㑑 㑒 㑓 㑔 㑕 㑖 㑗 㑘 㑙 㑚 㑛 㑜 㑝 㑞 㑟 㑠 㑡 㑢 㑣 㑤 㑥 㑦 㑧 㑨 㑩 㑪 㑫 㑬 㑭 㑮 㑯 㑰 㑱 㑲 㑳 㑴 㑵 㑶 㑷 㑸 㑹 㑺 㑻 㑼 㑽 㑾 㑿 㒀 㒁 㒂 㒃 㒄 㒅 㒆 㒇 㒈 㒉 㒊 㒋 㒌 㒍 㒎 㒏 㒐 㒑 㒒 㒓 㒔 㒕 㒖 㒗 㒘 㒙 㒚 㒛 㒜 㒝 㒞 㒟 㒠 㒡 㒢 㒣 㒤 㒥 㒦 㒧 㒨 㒩 㒪 㒫 㒬 㒭 㒮 㒯 㒰 㒱 㒲 㒳 㒴 㒵 㒶 㒷 㒸 㒹 㒺 㒻 㒼 㒽 㒾 㒿 㓀 㓁 㓂 㓃 㓄 㓅 㓆 㓇 㓈 㓉 㓊 㓋 㓌 㓍 㓎 㓏 㓐 㓑 㓒 㓓 㓔 㓕 㓖 㓗 㓘 㓙 㓚 㓛 㓜 㓝 㓞 㓟 㓠 㓡 㓢 㓣 㓤 㓥 㓦 㓧 㓨 㓩 㓪 㓫 㓬 㓭 㓮 㓯 㓰 㓱 㓲 㓳 㓴 㓵 㓶 㓷 㓸 㓹 㓺 㓻 㓼 㓽 㓾 㓿 㔀 㔁 㔂 㔃 㔄 㔅 㔆 㔇 㔈 㔉 㔊 㔋 㔌 㔍 㔎 㔏 㔐 㔑 㔒 㔓 㔔 㔕 㔖 㔗 㔘 㔙 㔚 㔛 㔜 㔝 㔞 㔟 㔠 㔡 㔢 㔣 㔤 㔥 㔦 㔧 㔨 㔩 㔪 㔫 㔬 㔭 㔮 㔯 㔰 㔱 㔲 㔳 㔴 㔵 㔶 㔷 㔸 㔹 㔺 㔻 㔼 㔽 㔾 㔿 㕀 㕁 㕂 㕃 㕄 㕅 㕆 㕇 㕈 㕉 㕊 㕋 㕌 㕍 㕎 㕏 㕐 㕑 㕒 㕓 㕔 㕕 㕖 㕗 㕘 㕙 㕚 㕛 㕜 㕝 㕞 㕟 㕠 㕡 㕢 㕣 㕤 㕥 㕦 㕧 㕨 㕩 㕪 㕫 㕬 㕭 㕮 㕯 㕰 㕱 㕲 㕳 㕴 㕵 㕶 㕷 㕸 㕹 㕺 㕻 㕼 㕽 㕾 㕿 㖀 㖁 㖂 㖃 㖄 㖅 㖆 㖇 㖈 㖉 㖊 㖋 㖌 㖍 㖎 㖏 㖐 㖑 㖒 㖓 㖔 㖕 㖖 㖗 㖘 㖙 㖚 㖛 㖜 㖝 㖞 㖟 㖠 㖡 㖢 㖣 㖤 㖥 㖦 㖧 㖨 㖩 㖪 㖫 㖬 㖭 㖮 㖯 㖰 㖱 㖲 㖳 㖴 㖵 㖶 㖷 㖸 㖹 㖺 㖻 㖼 㖽 㖾 㖿 㗀 㗁 㗂 㗃 㗄 㗅 㗆 㗇 㗈 㗉 㗊 㗋 㗌 㗍 㗎 㗏 㗐 㗑 㗒 㗓 㗔 㗕 㗖 㗗 㗘 㗙 㗚 㗛 㗜 㗝 㗞 㗟 㗠 㗡 㗢 㗣 㗤 㗥 㗦 㗧 㗨 㗩 㗪 㗫 㗬 㗭 㗮 㗯 㗰 㗱 㗲 㗳 㗴 㗵 㗶 㗷 㗸 㗹 㗺 㗻 㗼 㗽 㗾 㗿 㘀 㘁 㘂 㘃 㘄 㘅 㘆 㘇 㘈 㘉 㘊 㘋 㘌 㘍 㘎 㘏 㘐 㘑 㘒 㘓 㘔 㘕 㘖 㘗 㘘 㘙 㘚 㘛 㘜 㘝 㘞 㘟 㘠 㘡 㘢 㘣 㘤 㘥 㘦 㘧 㘨 㘩 㘪 㘫 㘬 㘭 㘮 㘯 㘰 㘱 㘲 㘳 㘴 㘵 㘶 㘷 㘸 㘹 㘺 㘻 㘼 㘽 㘾 㘿 㙀 㙁 㙂 㙃 㙄 㙅 㙆 㙇 㙈 㙉 㙊 㙋 㙌 㙍 㙎 㙏 㙐 㙑 㙒 㙓 㙔 㙕 㙖 㙗 㙘 㙙 㙚 㙛 㙜 㙝 㙞 㙟 㙠 㙡 㙢 㙣 㙤 㙥 㙦 㙧 㙨 㙩 㙪 㙫 㙬 㙭 㙮 㙯 㙰 㙱 㙲 㙳 㙴 㙵 㙶 㙷 㙸 㙹 㙺 㙻 㙼 㙽 㙾 㙿 㚀 㚁 㚂 㚃 㚄 㚅 㚆 㚇 㚈 㚉 㚊 㚋 㚌 㚍 㚎 㚏 㚐 㚑 㚒 㚓 㚔 㚕 㚖 㚗 㚘 㚙 㚚 㚛 㚜 㚝 㚞 㚟 㚠 㚡 㚢 㚣 㚤 㚥 㚦 㚧 㚨 㚩 㚪 㚫 㚬 㚭 㚮 㚯 㚰 㚱 㚲 㚳 㚴 㚵 㚶 㚷 㚸 㚹 㚺 㚻 㚼 㚽 㚾 㚿 㜀 㜁 㜂 㜃 㜄 㜅 㜆 㜇 㜈 㜉 㜊 㜋 㜌 㜍 㜎 㜏 㜐 㜑 㜒 㜓 㜔 㜕 㜖 㜗 㜘 㜙 㜚 㜛 㜜 㜝 㜞 㜟 㜠 㜡 㜢 㜣 㜤 㜥 㜦 㜧 㜨 㜩 㜪 㜫 㜬 㜭 㜮 㜯 㜰 㜱 㜲 㜳 㜴 㜵 㜶 㜷 㜸 㜹 㜺 㜻 㜼 㜽 㜾 㜿 㝀 㝁 㝂 㝃 㝄 㝅 㝆 㝇 㝈 㝉 㝊 㝋 㝌 㝍 㝎 㝏 㝐 㝑 㝒 㝓 㝔 㝕 㝖 㝗 㝘 㝙 㝚 㝛 㝜 㝝 㝞 㝟 㝠 㝡 㝢 㝣 㝤 㝥 㝦 㝧 㝨 㝩 㝪 㝫 㝬 㝭 㝮 㝯 㝰 㝱 㝲 㝳 㝴 㝵 㝶 㝷 㝸 㝹 㝺 㝻 㝼 㝽 㝾 㝿 㞀 㞁 㞂 㞃 㞄 㞅 㞆 㞇 㞈 㞉 㞊 㞋 㞌 㞍 㞎 㞏 㞐 㞑 㞒 㞓 㞔 㞕 㞖 㞗 㞘 㞙 㞚 㞛 㞜 㞝 㞞 㞟 㞠 㞡 㞢 㞣 㞤 㞥 㞦 㞧 㞨 㞩 㞪 㞫 㞬 㞭 㞮 㞯 㞰 㞱 㞲 㞳 㞴 㞵 㞶 㞷 㞸 㞹 㞺 㞻 㞼 㞽 㞾 㞿 㟀 㟁 㟂 㟃 㟄 㟅 㟆 㟇 㟈 㟉 㟊 㟋 㟌 㟍 㟎 㟏 㟐 㟑 㟒 㟓 㟔 㟕 㟖 㟗 㟘 㟙 㟚 㟛 㟜 㟝 㟞 㟟 㟠 㟡 㟢 㟣 㟤 㟥 㟦 㟧 㟨 㟩 㟪 㟫 㟬 㟭 㟮 㟯 㟰 㟱 㟲 㟳 㟴 㟵 㟶 㟷 㟸 㟹 㟺 㟻 㟼 㟽 㟾 㟿 㠀 㠁 㠂 㠃 㠄 㠅 㠆 㠇 㠈 㠉 㠊 㠋 㠌 㠍 㠎 㠏 㠐 㠑 㠒 㠓 㠔 㠕 㠖 㠗 㠘 㠙 㠚 㠛 㠜 㠝 㠞 㠟 㠠 㠡 㠢 㠣 㠤 㠥 㠦 㠧 㠨 㠩 㠪 㠫 㠬 㠭 㠮 㠯 㠰 㠱 㠲 㠳 㠴 㠵 㠶 㠷 㠸 㠹 㠺 㠻 㠼 㠽 㠾 㠿 㡀 㡁 㡂 㡃 㡄 㡅 㡆 㡇 㡈 㡉 㡊 㡋 㡌 㡍 㡎 㡏 㡐 㡑 㡒 㡓 㡔 㡕 㡖 㡗 㡘 㡙 㡚 㡛 㡜 㡝 㡞 㡟 㡠 㡡 㡢 㡣 㡤 㡥 㡦 㡧 㡨 㡩 㡪 㡫 㡬 㡭 㡮 㡯 㡰 㡱 㡲 㡳 㡴 㡵 㡶 㡷 㡸 㡹 㡺 㡻 㡼 㡽 㡾 㡿 㢀 㢁 㢂 㢃 㢄 㢅 㢆 㢇 㢈 㢉 㢊 㢋 㢌 㢍 㢎 㢏 㢐 㢑 㢒 㢓 㢔 㢕 㢖 㢗 㢘 㢙 㢚 㢛 㢜 㢝 㢞 㢟 㢠 㢡 㢢 㢣 㢤 㢥 㢦 㢧 㢨 㢩 㢪 㢫 㢬 㢭 㢮 㢯 㢰 㢱 㢲 㢳 㢴 㢵 㢶 㢷 㢸 㢹 㢺 㢻 㢼 㢽 㢾 㢿 㣀 㣁 㣂 㣃 㣄 㣅 㣆 㣇 㣈 㣉 㣊 㣋 㣌 㣍 㣎 㣏 㣐 㣑 㣒 㣓 㣔 㣕 㣖 㣗 㣘 㣙 㣚 㣛 㣜 㣝 㣞 㣟 㣠 㣡 㣢 㣣 㣤 㣥 㣦 㣧 㣨 㣩 㣪 㣫 㣬 㣭 㣮 㣯 㣰 㣱 㣲 㣳 㣴 㣵 㣶 㣷 㣸 㣹 㣺 㣻 㣼 㣽 㣾 㣿 㤀 㤁 㤂 㤃 㤄 㤅 㤆 㤇 㤈 㤉 㤊 㤋 㤌 㤍 㤎 㤏 㤐 㤑 㤒 㤓 㤔 㤕 㤖 㤗 㤘 㤙 㤚 㤛 㤜 㤝 㤞 㤟 㤠 㤡 㤢 㤣 㤤 㤥 㤦 㤧 㤨 㤩 㤪 㤫 㤬 㤭 㤮 㤯 㤰 㤱 㤲 㤳 㤴 㤵 㤶 㤷 㤸 㤹 㤺 㤻 㤼 㤽 㤾 㤿 㥀 㥁 㥂 㥃 㥄 㥅 㥆 㥇 㥈 㥉 㥊 㥋 㥌 㥍 㥎 㥏 㥐 㥑 㥒 㥓 㥔 㥕 㥖 㥗 㥘 㥙 㥚 㥛 㥜 㥝 㥞 㥟 㥠 㥡 㥢 㥣 㥤 㥥 㥦 㥧 㥨 㥩 㥪 㥫 㥬 㥭 㥮 㥯 㥰 㥱 㥲 㥳 㥴 㥵 㥶 㥷 㥸 㥹 㥺 㥻 㥼 㥽 㥾 㥿 㦀 㦁 㦂 㦃 㦄 㦅 㦆 㦇 㦈 㦉 㦊 㦋 㦌 㦍 㦎 㦏 㦐 㦑 㦒 㦓 㦔 㦕 㦖 㦗 㦘 㦙 㦚 㦛 㦜 㦝 㦞 㦟 㦠 㦡 㦢 㦣 㦤 㦥 㦦 㦧 㦨 㦩 㦪 㦫 㦬 㦭 㦮 㦯 㦰 㦱 㦲 㦳 㦴 㦵 㦶 㦷 㦸 㦹 㦺 㦻 㦼 㦽 㦾 㦿 㧀 㧁 㧂 㧃 㧄 㧅 㧆 㧇 㧈 㧉 㧊 㧋 㧌 㧍 㧎 㧏 㧐 㧑 㧒 㧓 㧔 㧕 㧖 㧗 㧘 㧙 㧚 㧛 㧜 㧝 㧞 㧟 㧠 㧡 㧢 㧣 㧤 㧥 㧦 㧧 㧨 㧩 㧪 㧫 㧬 㧭 㧮 㧯 㧰 㧱 㧲 㧳 㧴 㧵 㧶 㧷 㧸 㧹 㧺 㧻 㧼 㧽 㧾 㧿 㨀 㨁 㨂 㨃 㨄 㨅 㨆 㨇 㨈 㨉 㨊 㨋 㨌 㨍 㨎 㨏 㨐 㨑 㨒 㨓 㨔 㨕 㨖 㨗 㨘 㨙 㨚 㨛 㨜 㨝 㨞 㨟 㨠 㨡 㨢 㨣 㨤 㨥 㨦 㨧 㨨 㨩 㨪 㨫 㨬 㨭 㨮 㨯 㨰 㨱 㨲 㨳 㨴 㨵 㨶 㨷 㨸 㨹 㨺 㨻 㨼 㨽 㨾 㨿 㩀 㩁 㩂 㩃 㩄 㩅 㩆 㩇 㩈 㩉 㩊 㩋 㩌 㩍 㩎 㩏 㩐 㩑 㩒 㩓 㩔 㩕 㩖 㩗 㩘 㩙 㩚 㩛 㩜 㩝 㩞 㩟 㩠 㩡 㩢 㩣 㩤 㩥 㩦 㩧 㩨 㩩 㩪 㩫 㩬 㩭 㩮 㩯 㩰 㩱 㩲 㩳 㩴 㩵 㩶 㩷 㩸 㩹 㩺 㩻 㩼 㩽 㩾 㩿 㪀 㪁 㪂 㪃 㪄 㪅 㪆 㪇 㪈 㪉 㪊 㪋 㪌 㪍 㪎 㪏 㪐 㪑 㪒 㪓 㪔 㪕 㪖 㪗 㪘 㪙 㪚 㪛 㪜 㪝 㪞 㪟 㪠 㪡 㪢 㪣 㪤 㪥 㪦 㪧 㪨 㪩 㪪 㪫 㪬 㪭 㪮 㪯 㪰 㪱 㪲 㪳 㪴 㪵 㪶 㪷 㪸 㪹 㪺 㪻 㪼 㪽 㪾 㪿 㫀 㫁 㫂 㫃 㫄 㫅 㫆 㫇 㫈 㫉 㫊 㫋 㫌 㫍 㫎 㫏 㫐 㫑 㫒 㫓 㫔 㫕 㫖 㫗 㫘 㫙 㫚 㫛 㫜 㫝 㫞 㫟 㫠 㫡 㫢 㫣 㫤 㫥 㫦 㫧 㫨 㫩 㫪 㫫 㫬 㫭 㫮 㫯 㫰 㫱 㫲 㫳 㫴 㫵 㫶 㫷 㫸 㫹 㫺 㫻 㫼 㫽 㫾 㫿 㬀 㬁 㬂 㬃 㬄 㬅 㬆 㬇 㬈 㬉 㬊 㬋 㬌 㬍 㬎 㬏 㬐 㬑 㬒 㬓 㬔 㬕 㬖 㬗 㬘 㬙 㬚 㬛 㬜 㬝 㬞 㬟 㬠 㬡 㬢 㬣 㬤 㬥 㬦 㬧 㬨 㬩 㬪 㬫 㬬 㬭 㬮 㬯 㬰 㬱 㬲 㬳 㬴 㬵 㬶 㬷 㬸 㬹 㬺 㬻 㬼 㬽 㬾 㬿 㭀 㭁 㭂 㭃 㭄 㭅 㭆 㭇 㭈 㭉 㭊 㭋 㭌 㭍 㭎 㭏 㭐 㭑 㭒 㭓 㭔 㭕 㭖 㭗 㭘 㭙 㭚 㭛 㭜 㭝 㭞 㭟 㭠 㭡 㭢 㭣 㭤 㭥 㭦 㭧 㭨 㭩 㭪 㭫 㭬 㭭 㭮 㭯 㭰 㭱 㭲 㭳 㭴 㭵 㭶 㭷 㭸 㭹 㭺 㭻 㭼 㭽 㭾 㭿 㮀 㮁 㮂 㮃 㮄 㮅 㮆 㮇 㮈 㮉 㮊 㮋 㮌 㮍 㮎 㮏 㮐 㮑 㮒 㮓 㮔 㮕 㮖 㮗 㮘 㮙 㮚 㮛 㮜 㮝 㮞 㮟 㮠 㮡 㮢 㮣 㮤 㮥 㮦 㮧 㮨 㮩 㮪 㮫 㮬 㮭 㮮 㮯 㮰 㮱 㮲 㮳 㮴 㮵 㮶 㮷 㮸 㮹 㮺 㮻 㮼 㮽 㮾 㮿 㯀 㯁 㯂 㯃 㯄 㯅 㯆 㯇 㯈 㯉 㯊 㯋 㯌 㯍 㯎 㯏 㯐 㯑 㯒 㯓 㯔 㯕 㯖 㯗 㯘 㯙 㯚 㯛 㯜 㯝 㯞 㯟 㯠 㯡 㯢 㯣 㯤 㯥 㯦 㯧 㯨 㯩 㯪 㯫 㯬 㯭 㯮 㯯 㯰 㯱 㯲 㯳 㯴 㯵 㯶 㯷 㯸 㯹 㯺 㯻 㯼 㯽 㯾 㯿 㰀 㰁 㰂 㰃 㰄 㰅 㰆 㰇 㰈 㰉 㰊 㰋 㰌 㰍 㰎 㰏 㰐 㰑 㰒 㰓 㰔 㰕 㰖 㰗 㰘 㰙 㰚 㰛 㰜 㰝 㰞 㰟 㰠 㰡 㰢 㰣 㰤 㰥 㰦 㰧 㰨 㰩 㰪 㰫 㰬 㰭 㰮 㰯 㰰 㰱 㰲 㰳 㰴 㰵 㰶 㰷 㰸 㰹 㰺 㰻 㰼 㰽 㰾 㰿 㱀 㱁 㱂 㱃 㱄 㱅 㱆 㱇 㱈 㱉 㱊 㱋 㱌 㱍 㱎 㱏 㱐 㱑 㱒 㱓 㱔 㱕 㱖 㱗 㱘 㱙 㱚 㱛 㱜 㱝 㱞 㱟 㱠 㱡 㱢 㱣 㱤 㱥 㱦 㱧 㱨 㱩 㱪 㱫 㱬 㱭 㱮 㱯 㱰 㱱 㱲 㱳 㱴 㱵 㱶 㱷 㱸 㱹 㱺 㱻 㱼 㱽 㱾 㱿 㲀 㲁 㲂 㲃 㲄 㲅 㲆 㲇 㲈 㲉 㲊 㲋 㲌 㲍 㲎 㲏 㲐 㲑 㲒 㲓 㲔 㲕 㲖 㲗 㲘 㲙 㲚 㲛 㲜 㲝 㲞 㲟 㲠 㲡 㲢 㲣 㲤 㲥 㲦 㲧 㲨 㲩 㲪 㲫 㲬 㲭 㲮 㲯 㲰 㲱 㲲 㲳 㲴 㲵 㲶 㲷 㲸 㲹 㲺 㲻 㲼 㲽 㲾 㲿 㳀 㳁 㳂 㳃 㳄 㳅 㳆 㳇 㳈 㳉 㳊 㳋 㳌 㳍 㳎 㳏 㳐 㳑 㳒 㳓 㳔 㳕 㳖 㳗 㳘 㳙 㳚 㳛 㳜 㳝 㳞 㳟 㳠 㳡 㳢 㳣 㳤 㳥 㳦 㳧 㳨 㳩 㳪 㳫 㳬 㳭 㳮 㳯 㳰 㳱 㳲 㳳 㳴 㳵 㳶 㳷 㳸 㳹 㳺 㳻 㳼 㳽 㳾 㳿 㴀 㴁 㴂 㴃 㴄 㴅 㴆 㴇 㴈 㴉 㴊 㴋 㴌 㴍 㴎 㴏 㴐 㴑 㴒 㴓 㴔 㴕 㴖 㴗 㴘 㴙 㴚 㴛 㴜 㴝 㴞 㴟 㴠 㴡 㴢 㴣 㴤 㴥 㴦 㴧 㴨 㴩 㴪 㴫 㴬 㴭 㴮 㴯 㴰 㴱 㴲 㴳 㴴 㴵 㴶 㴷 㴸 㴹 㴺 㴻 㴼 㴽 㴾 㴿 㵀 㵁 㵂 㵃 㵄 㵅 㵆 㵇 㵈 㵉 㵊 㵋 㵌 㵍 㵎 㵏 㵐 㵑 㵒 㵓 㵔 㵕 㵖 㵗 㵘 㵙 㵚 㵛 㵜 㵝 㵞 㵟 㵠 㵡 㵢 㵣 㵤 㵥 㵦 㵧 㵨 㵩 㵪 㵫 㵬 㵭 㵮 㵯 㵰 㵱 㵲 㵳 㵴 㵵 㵶 㵷 㵸 㵹 㵺 㵻 㵼 㵽 㵾 㵿 㶀 㶁 㶂 㶃 㶄 㶅 㶆 㶇 㶈 㶉 㶊 㶋 㶌 㶍 㶎 㶏 㶐 㶑 㶒 㶓 㶔 㶕 㶖 㶗 㶘 㶙 㶚 㶛 㶜 㶝 㶞 㶟 㶠 㶡 㶢 㶣 㶤 㶥 㶦 㶧 㶨 㶩 㶪 㶫 㶬 㶭 㶮 㶯 㶰 㶱 㶲 㶳 㶴 㶵 㶶 㶷 㶸 㶹 㶺 㶻 㶼 㶽 㶾 㶿 㷀 㷁 㷂 㷃 㷄 㷅 㷆 㷇 㷈 㷉 㷊 㷋 㷌 㷍 㷎 㷏 㷐 㷑 㷒 㷓 㷔 㷕 㷖 㷗 㷘 㷙 㷚 㷛 㷜 㷝 㷞 㷟 㷠 㷡 㷢 㷣 㷤 㷥 㷦 㷧 㷨 㷩 㷪 㷫 㷬 㷭 㷮 㷯 㷰 㷱 㷲 㷳 㷴 㷵 㷶 㷷 㷸 㷹 㷺 㷻 㷼 㷽 㷾 㷿 㸀 㸁 㸂 㸃 㸄 㸅 㸆 㸇 㸈 㸉 㸊 㸋 㸌 㸍 㸎 㸏 㸐 㸑 㸒 㸓 㸔 㸕 㸖 㸗 㸘 㸙 㸚 㸛 㸜 㸝 㸞 㸟 㸠 㸡 㸢 㸣 㸤 㸥 㸦 㸧 㸨 㸩 㸪 㸫 㸬 㸭 㸮 㸯 㸰 㸱 㸲 㸳 㸴 㸵 㸶 㸷 㸸 㸹 㸺 㸻 㸼 㸽 㸾 㸿 㹀 㹁 㹂 㹃 㹄 㹅 㹆 㹇 㹈 㹉 㹊 㹋 㹌 㹍 㹎 㹏 㹐 㹑 㹒 㹓 㹔 㹕 㹖 㹗 㹘 㹙 㹚 㹛 㹜 㹝 㹞 㹟 㹠 㹡 㹢 㹣 㹤 㹥 㹦 㹧 㹨 㹩 㹪 㹫 㹬 㹭 㹮 㹯 㹰 㹱 㹲 㹳 㹴 㹵 㹶 㹷 㹸 㹹 㹺 㹻 㹼 㹽 㹾 㹿 㺀 㺁 㺂 㺃 㺄 㺅 㺆 㺇 㺈 㺉 㺊 㺋 㺌 㺍 㺎 㺏 㺐 㺑 㺒 㺓 㺔 㺕 㺖 㺗 㺘 㺙 㺚 㺛 㺜 㺝 㺞 㺟 㺠 㺡 㺢 㺣 㺤 㺥 㺦 㺧 㺨 㺩 㺪 㺫 㺬 㺭 㺮 㺯 㺰 㺱 㺲 㺳 㺴 㺵 㺶 㺷 㺸 㺹 㺺 㺻 㺼 㺽 㺾 㺿 㻀 㻁 㻂 㻃 㻄 㻅 㻆 㻇 㻈 㻉 㻊 㻋 㻌 㻍 㻎 㻏 㻐 㻑 㻒 㻓 㻔 㻕 㻖 㻗 㻘 㻙 㻚 㻛 㻜 㻝 㻞 㻟 㻠 㻡 㻢 㻣 㻤 㻥 㻦 㻧 㻨 㻩 㻪 㻫 㻬 㻭 㻮 㻯 㻰 㻱 㻲 㻳 㻴 㻵 㻶 㻷 㻸 㻹 㻺 㻻 㻼 㻽 㻾 㻿 㼀 㼁 㼂 㼃 㼄 㼅 㼆 㼇 㼈 㼉 㼊 㼋 㼌 㼍 㼎 㼏 㼐 㼑 㼒 㼓 㼔 㼕 㼖 㼗 㼘 㼙 㼚 㼛 㼜 㼝 㼞 㼟 㼠 㼡 㼢 㼣 㼤 㼥 㼦 㼧 㼨 㼩 㼪 㼫 㼬 㼭 㼮 㼯 㼰 㼱 㼲 㼳 㼴 㼵 㼶 㼷 㼸 㼹 㼺 㼻 㼼 㼽 㼾 㼿 㽀 㽁 㽂 㽃 㽄 㽅

現在の人間たちの協力の最たるものは「職業」です。多くの人は職を持っていて、特定の仕事をするだけで生きていけるようになっていきます。私の場合であれば大学教員ですので、大学でコウギ(き)をしたり、研究をしているだけで給料をもらって、衣食住を賄(注4 まかな)うことができます。私が身に着けている衣服も毎日食べている食料も、住んでいる家も、自分で作ったものではありません。作ろうと思っても質の高いものは作ることができません。その代わりに他のもつと技術のある人間が仕事として作ってくれたものを買っています。

現代人には当たり前すぎて普段はあまり意識しないかもしれませんが、これは大きな協力関係です。皆(みな)が自分以外の誰かのために質の高い仕事をするので、全員が安全で快適な生活を送ることができています。

職業という協力関係の重要さは、誰かが仕事を辞めたらどうなるかを考えるとすぐにわかります。たとえば、衣服を作る仕事の人が全員辞めてしまったら、みんな自分の服は自分で作らないといけなくなります。きつと粗末(a) ぐそまつな衣服しか作れないことでしょう。忙しい人は全く作れないかもしれません。着替えを用意しておくのも大変ですし、洗っているうちにぼろになるでしょうから、洗濯(せんたく)もあまりしなくなるでしょう。衣服は汚れ、感染症(しんじょう)も広まりやすくなるかもしれません。現代人が安く品質の高い衣服を手に入れることができてるのは、作ることに特化した人が専門に作ってくれるおかげです。

そしてそれは一方的な関係ではありません。衣服を作る人も食料や住居は別の専門家に作ってもらっています。私たち人間は、現在、社会という大きな協力関係の網(あみ)の目の中に組み込まれています。

「社会の中に組み込まれる」ということは「社会の歯車になる」ということです。この言葉にはあまりいい印象はないかもしれませんが、自分の個性とかアイデンティティがおびやかされていると感じるかもしれません。しかしそれは誤解だと私は思います。むしろ社会の歯車になることでほとんどの人は個性を発揮して、みんなの役に立てるのだと思います。

1、社会が全く存在しない状況(きょうきょう)を考えてみましょう。父親、母親、小さい子どもの3人家族だけで無人島で暮らしているような状況です。この場合、生きていくために必要な仕事はすべて3人だけで分担しないといけません。狩り(か)をする

のは、生物的に力の強い大人の男性である父親になるでしょう。植物や果物を採集したり、調理したりするのは、狩りに不向きな女性や子どもの仕事になるでしょう。たとえ、狩りなんて荒^{あら}っぽいことが嫌^{きら}いな男性や、採集よりも狩りの方が好きな女性だったとしても、餓^うえないためには身体的に向いている方をやらざるをえません。狩りに失敗したり、食べ物を見つけないことに失敗したりすれば、すぐに命のキキが訪^きれます。また、この世界では、勉強が得意とか、絵をかくのが得意とか、コミュニケーション能力が高いとか低いなどの個性が役に立つことはありません。なにより必要なのは、獲^え物をしとめたり、食料を確保する能力です。力や体力が何よりも重要です。強く丈夫^{じょうぶ}で健康な人間だけが生き残る世界です。それ以外の個性には出番はありません。

一方で私たちの社会は違います。力や体力が必要な職業もあれば、勉強や絵を描^かくことやコミュニケーション能力が必要な職業もあります。どれか1つの能力が優^{すぐ}れていれば、十分に活躍^{やく}の場が見つかります。少なくとも狩^{しゅりょう}猟採集社会よりは、今の社会の方が自分に合った役割(菌車)が見つかる可能性が高いように思います。

こうした他人との協力からなる社会を形成するようになると、人間という生物が増える単位も変わってきます。人間以前の生き物は自分の力で自分だけを増やしていました。細菌^{きん(注6)}も線虫もカエルも虫もサルも、増えることができるかどうかは自分の能力や運によって決まっていました。優れた能力を持っていれば生殖^{せいしよく}に成功し、子孫を作ることができますし、そうでなければ血統は途絶^{とだ}えてしまいます。

2 協力関係の網^{あみ}の目の中にいる人間は違います。自分が生き残って増えるためには【A】の能力も重要です。

また【B】の能力もほかの人が生き残って増えることに貢献^{こうけん}しています。自分の命が大事なものと同じように、他の人の命も大事になっていきます。増える単位が【C】の体を超^こえて広がっているといってもいいかもしれません。

⑦ このような大キボな協力関係は人間ならではの特徴^{ちよう}です。人間以外の生物が非血縁^{しん}個体と協力することは、特殊なケースを除^くいてほとんどありません。なぜ人間のみでこのような特殊な能力が生まれたのかについてはいろいろな説があります。人間

の持つ高度な言語能力や認知能力や寿命の長さが大事だったと言われています。また、それらの能力が生まれた背景には、狩猟採集生活の中で協力する必要性があったことや、子どもが成長するまでに時間がかかることから子育てに他の個体の協力が必要だったことなどが指摘されています。

このような性質のどれが直接的原因だったのかはわかりませんが、いずれにせよ、このような他の個体との協力を可能とする人間の性質は、元をたどれば少産少死の戦略によってもたらされたものです。命を大事にして長く生きるようになり、他個体と付き合うことが可能になったために協力することが有利になりました。

3、人間には他者を認識する知能や、他者の気持ちを察することのできる共感能力も備わっています。結果として協力関係がどんどん発展していきました。私たち人間は地球上の他のどんな生物よりも協力的な、いわば「やさしい」生物です。このようなやさしさの進化は少産少死の戦略を極めてきた生物にとって必然だったように思えます。

(市橋伯一『増えるものたちの進化生物学』)

(注1) 威嚇…威力を示して相手を怖がらせること。

(注2) 合理的…理になっっているさま。

(注3) 少産少死…少なく産んで大切に育て、死亡率を低くすること。

(注4) 賄う…必要なものを用意する。

(注5) アイデンティティ…「自分らしさ」や「自分はこんな人間だ」といったことを意識する気持ちのこと。

(注6) 線虫…土の中や水中などいたるところに生息している線状の微小な生物。

問一 〓線①②の漢字はひらがなに、カタカナは漢字にそれぞれ直して書きなさい。

問二 線①「粗末^{そまつ}な」・②「必然^{ひつぜん}だった」の意味として最も適當なものをそれぞれ後のの中から選び、記号で答えなさい。

- | | |
|---|--|
| <p>①「粗末^{そまつ}な」</p> <p>ア 万人受けしない</p> <p>イ その場のぎである</p> <p>ウ 品質などが上等でない</p> <p>エ シンプルで機能的である</p> | <p>②「必然^{ひつぜん}だった」</p> <p>ア 必要になる可能性があった</p> <p>イ 必死でやる必要があった</p> <p>ウ 必ずそうなると決まっていた</p> <p>エ 必ずそうなるとは限らなかった</p> |
|---|--|

問三 1 3 に入ることばとして最も適當なものをそれぞれ次のの中から選び、記号で答えなさい。(同じ記号を二回使用することはできません)

- ア あるいは イ しかも ウ なぜなら エ ところが オ たとえば

問四 に入ることばとして最も適當なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア その人を好きかどうか
- イ その人がいい人かどうか
- ウ その人とまた会うかどうか
- エ その人と性格が合うかどうか

問五 線①「血縁関係にない個体との協力関係が発展してきた」とありますが、人間はなぜそれが可能だったのでしょうか。「人間は、」からはじめて「から。」で終わるように、本文の内容に即^{そく}して説明しなさい。

問六 — 線②「これ」とは、ここでは何をさしていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 他人をうまく利用することで、自分は働かずに楽をしていること。
- イ 自分の行いがいつか自分に返ってくると信じて、働き続けること。
- ウ 人にたよらず、自分の生活に必要なものを全て自分で作り出すこと。
- エ それぞれが専門的な仕事をして、生活に必要なものを提供しあうこと。

問七 — 線③「社会の歯車になる」とは、ここではどういうことですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 感情をおさえて言われた通りに働く、組織の一部になること。
- イ みんなの役に立つために、自ら社会を動かす行動を起こすこと。
- ウ 自分の個性や能力を生かし、社会の一員として他者に貢献すること。
- エ 自分の夢の実現よりも、人の役に立つ職業につくことを優先すること。

問八 — 線④「強くて丈夫で健康な人間だけが生き残る世界」とは、どのような世界ですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 個々の才能や協力が生存において重要視される世界
- イ みんなのために自分の才能を活かすことが大切な世界
- ウ 身体的能力が重視され、力や体力が生存に必要とされる世界
- エ 生活に必要なものを瞬時に見ぬく、賢さや先見性が求められる世界

問九 「A」「C」に入ることばの組み合わせとして最も適當なものを後の中から選び、記号で答えなさい。

ア [A]自分 ― [B]他の人 ― [C]自分

イ [A]他の人 ― [B]自分 ― [C]自分

ウ [A]自分 ― [B]他の人 ― [C]他の人

エ [A]他の人 ― [B]自分 ― [C]他の人

問十 ― 線⑤「やさしさの進化」とありますが、それはどういうことですか。本文の内容に即して、四十字以上五十字以内で答えなさい。